

2017年9月3日

**「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。…もう罪を犯してはならない。」 ヨハネ 8 : 11**

この「姦淫の女」のエピソードは、前後に関係ない独立した断片です。主イエスは罪深い者も救われる神の御子です。

「姦淫の現場で捕らえられた女」をファリサイ派の人々は「訴える口実を得るために」主の前に連れ出します。モーセの律法は「こういう女は石で打ち殺せ」と厳しいのです（→レビ 20 : 10、申命 22 : 24）。「あなたはどうお考えになりますか」と、主を苦しめる質問をします。

それに対して主は、「かがみ込み、指で地面に何か書き始め」て、無視されますが、彼らがしつこく問い続けるので、「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず（最初に）、この女に石を投げなさい」と、責任も重い証人になるように要求されます（→申命 17 : 7）。

人生経験の長い「年長者から始まって…立ち去ってしまい」ます（死刑中止）。結果的に「イエスひとりと、真ん中にいた女が残った」だけです。「キリストの裁きの座の前に引き出され、罪ある者とされるほど幸せなことがあるのか。」（カルヴァン）彼女は覚悟を決めてそこにいたでしょうが、主は「わたしもあなたを罰しない」（口語訳）と釈放されます。

罰を受けるのが当然の罪深い私たちのために、「探し求めて救いたまいし主の御恵み」（讃 249 番）を賛美しましょう。

2017年9月10日

**「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」 ヨハネ 8 : 12**

仮庵祭の時、神殿の外庭の「宝物殿の近く」で、主イエスはご自分が「世の光である」と語られ、人々を招かれます。

祭りの間、その庭には4基の燭台が据えられて、夜になると明るい光を放って「火の柱」（出エジプト 13 : 21）を象徴していました。主は光として来たと言われますが、ファリサイ派は、「自分について証しする」のは無効だとします。

主は一つ一つ丁寧に答えられます（子供達相手に相撲を取る横綱のように！）。①「自分がどこから来て、どこへ行くのか」を知る神の御子の証しです。②「肉に従って裁く」人間ではなく、「父（なる神）と共にいる」御子です。③「二人が行う証しは真実」（→申命 19 : 15）なので、「父もわたしについて証しをしてくださる」ことで十分なはずです。

彼らは、「あなたの父はどこに？」と大切な質問をします。しかし、「彼らは、目の前に御子がおられるのに…見ていないのである。」（カルヴァン）主は、彼らが「わたしもわたしの父も知らない」と嘆かれますが、幸い「だれもイエスを捕らえなかった」ので（→7 : 30）、その時も守られました（私たちの生死も！）。

暗闇の中を歩むような時でも（ニューマン牧師の苦難！）、「妙なる道しるべの光」（讃 288 番）となってくくださる主です。

2017年9月17日

**『わたしはある』ということ信じないならば…罪のうちに死ぬことになる。』 ヨハネ8:24**

仮庵祭は秋の祭りですが、翌年の過越祭（春先）に、主イエスは十字架の死を迎えられます。まもなく去って行かれますが、これからも信じる者と一緒です。

「わたしの行く所（天）に、あなたたちは来ることができない」と主はユダヤ人たちに言われます。彼らは、「自殺でもするつもりなのだろうか」と見当違いな見方をします（→7:35）。主は救い主として御父から遣わされたので（→3:16）、主を信じなければ「自分の罪のうちに死ぬことになる」と語られます。

その真剣さに気付いた人々は、「あなたは、いったい、どなたですか」と真剣に問い、主も「それは初めから（＝根源的な問題として）話している」とはっきり答え、これは御父からの「世に向かって語る」メッセージだと言われます。

それでもまだ「イエスが御父について話しておられることを悟らなかった」人々に対して、「人の子（イエス）を上げたとき（十字架→復活→昇天）…分かるだろう」と言われ、御父は「わたしをひとりにしてはおかれない」（→16:32）と信頼を語られるので、心を打たれた人々は「イエスを信じた」とあります。

「わたしは（確かに・あなたと共に）ある」（→出エジプト3:12, 14）と信じて、「わが君」（讃352番）と歌います。

2017年9月24日

**『あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。』 ヨハネ8:32**

主イエスを「信じたユダヤ人」の多くは主の「言葉にとどまる」ことが出来ずに去ります（日本の伝道の問題！）。

主は彼らに「キリスト者の自由」（ルターの宗教改革のモットー）を与えたいのです。しかし、「アブラハムの子孫…奴隷になったことはない」ことを誇る彼らは反発し、神の御子と共に「子どものような自由」（カルヴァン）を味わえる救いを拒絶するのです（罪の奴隷！）。

ユダヤ人の先祖アブラハムは神に従順でしたが、彼らは父親似ではなく、むしろ「自分の父（悪魔→8:44）」に似ていて、「わたしを殺そうとしている」と言われます（姦淫によって生まれた！）。「神があなたたちの父であれば、あなたたちはわたしを愛するはずである」というのが大切です（憎む人→愛する人）。

主は、「わたしの言っていることが、なぜ分からないのか」と嘆かれます。彼らは主の「言葉を聞くことができない」のです（会話のない夫婦！）。「悪魔は…真理をよりどころとしていない」のですが、主は「真理を語る」方です。「神に属する者は神の言葉を聞く」はずです。（→百年史『御言葉に導かれる教会』）。

主の真理に生きる私たちは、快晴の空（9月18日！）のように、晴れやかに「光に歩めよ」（讃326番）と歌います。